

視点国際

中ソ和解に備えよ

―チャイナ・カードの危険性―

七〇年代以降、米、中、ソ三極による外交ゲームは、激しく対立する二国が他の一国をめぐって「友好獲得競争」を展開するという奇妙な図式を呈してきたようだ。

その点、大国間のバランス・オブ・パワー理論に立脚したニクソン・キッシンジャー外交は、激しい中ソ対立を最大限に利用、中ソ等距離外交を推進し、三極外交ゲームの中で比較的優位な立場を維持してきた。だが、ソ連軍のアフガン侵攻で米ソ関係が「新しい冷戦」の様相を呈するに伴い、今度は相対的に中国が有利な立場にあるようだ。中国はいまや、新しい米ソ冷戦をシリ目に、米ソに対しフリーハンドの外交を行い得るといえるかもしれない。

こうした複雑な三極関係の中で、カータ

ー・ブレジンスキー外交はその対ソ戦略に中国を組み入れるべく、ますます中国寄り路線を鮮明にしつつある。カーター政権発足以来、ブレジンスキー補佐官、モ

ンデル副大統領、ブラウ

ン国防長官ら要人が相次いで訪中、懸案の米中国交正常化もなし逃げた。しかも、ソ連に先がけて中国へ最恵国待遇を供与したほか、ブラウン訪中時には中国向け武器輸出計画も協議されたもよう。カーター政策は米ソ関係が悪化すればするほど、相関的に対中外交に力を注いでいるかにみえる。

しかし、このようなカーター政権の「チャイナ・カード外交」には、重大な落とし穴が待ち受けているといわざるを得ない。ほかでもない、中ソ和解の可能性である。

もとより、七〇年代以降の米国の世界戦略には、その根底に中ソ対立への期待がこめられているが、とりわけカーター政権は、いわば永続的な中ソ対立という前提に立つて世界戦略を進めているふしがみられる。

それだけに、中ソ和解が実現した場合、その衝撃と脅威は大きく、世界戦略の抜本的な直しを迫られよう。まさに中ソ和解こそ、「世界の自由にとって最悪の打撃であり、米国の外交政策立案者を最も悩ます悪夢」(ニューヨーク・タイムズ)といえる。

だが、「永遠の中ソ対立」への米側の期待とは裏腹に、中ソ両国はいまや、和解への衝動を内部に増幅し合っているのではなからうか。確かに中ソ条約は廃棄され、第三世界を舞台にした中ソ外交合戦もますます激化しており、中ソ関係は国家関係に限って言えば悪化の一途をたどっている。とはいえ、最近の中国内政のドラスチックな変貌は、中国社会とソ連社会の「同一化」を促し、中国社会にソ連と同じ社会主義国であるという共感を再び植えつけているかにみえるのである。

毛沢東死後、劉少奇、彭德懷といった親ソ派が続々名替回復し、個人崇拜も否定され、西側との交流も進むとあっては、中ソ・イデオロギー論争の争点は事実上無意味なものになってしまった。「中国自身が修

正主義を進めている以上、ソ連を修正主義と非難することは決してできない」(米紙タリスチャン・サイエンス・モニター四月十六日)わけで、いまや中ソ論争こそ「名存実亡」なのである。

そして、中国内政の変化は、次にはソ連社会の再評価をもたらすのではなからうか。先ごろハルビンで開かれた第二回現代ソ連文学研究会では「ソ連の内政は基本的には社会主義国であり、資本主義は復活していない」との議論が大勢を占めたといわれるが、おそらく今後ともこうしたソ連再評価論議が活発化していくことだろう。さらに中ソ和解は、中国にとって安全保障面、経済面でも中国に利益をもたらし得る状況になっている。

一方のソ連が中ソ和解を長期的な外交戦略に据え、今後とも中国に対し硬軟両様の圧力をかけていくとみられるだけに、当面中ソ和解のカギは中国側の出方にかかっているとさえいえる。

そして、かりに中ソ和解が実現するとすれば、それは間近に迫ったポスト・ブレジ

ネフ時代、その後に訪れるとみられるポスト鄧小平時代ではなからうか。過去三十年の中ソ関係を振り返ってみると、最高指導者の死後ないし追放後指導者との間で必ず関係調整の試みがなされているという経緯もさることながら、今後中国社会の第一戦に登場する世代は、青年期にソ連から多くの影響を受けてきたからである。鄧小平副首相の有力後継者胡耀邦党総書記は中ソ蜜月期のモスクワ留学組であり、その対ソ観は毛沢東、鄧小平のそれとは当然大きく異なっている。また、「中国の四十年代以下の世代はトルストイやチェーホフ、あるいはオストロフスキーなどソ連の代表的作家の作品に親しんで育ってきたし、……ソ連のモデルに従って工場や鉱山、ホテルの建設、操業方法を学んできた」「中国人がモスクワを訪れてソ連外交を激しく非難したとしても、その社会構造にはおそらく自国に帰ったような安堵感を抱くことだろう」(前掲紙)といった指摘も見逃せない。

こうした中ソ関係の流動性に注目し、カーター政権の「チャイナ・カード」外交を

戒める見方も出始めた。たとえば、スタンレー・ホフマン氏は米誌「フォーリン・ポリシー」八〇年冬季号に寄稿した論文の中で、「極東での近年の米国の大きな成果——中国の承認と和解——は、同時に危険と苦境の源でもある。米国は中国指導者が好む形の反ソ世界同盟と、モスクワと北京との間の均衡をとるゲームという二つの異なる選択を強いられている。しかし、米国の目標はあくまで後者であるべきだ」と述べ、かつての中ソ等距離外交への復帰を呼びかけた。また、マイケル・ビルズベリ氏も、ニューズウィーク誌四月二十一日号とのインタビューで、「彼らは社会主義国であり、われわれは資本主義国だ。その違いを決して忘れるべきではない」と述べ、中国との「同盟関係」に警告を発している。

カーター政権としても、「永遠の中ソ対立の神話」(中嶋嶺雄氏)にとらわれて、過度のチャイナ・カード外交を展開した場合、中ソ和解という「最悪の打撃」が先に待ち構えているやもしれないことを認識すべきだろう。(名越健郎)